

ネバーランドの夜明け

やなぎさわ ゆきい

一、

「ケンタウルス、露をふらせ。」

ジョバンニのすぐ横を、いくつもの青い灯が走り抜けていった。光の粒が虹彩を灼く。しばらくのあいだジョバンニは、大通りへと向かう細い路地の真ん中で歩みをとめ、そっと臉を閉じた。ばちばちとマグネシウムの光を生む音が響き、幼い子どもたちの高い声がにぎやかに突き抜ける。ゆるりと満ちてくる火薬のにおいが、鼻腔の内側からジョバンニを刺激する。

「ああ、今夜は星祭りだった。」

闇を取り戻したまぶたを押し上げると、ジョバンニの目の前で、街はいっぺんに祭りの飾りを纏い、青く青く輝き始めた。

「どうして忘れていたんだろうか。」

ジョバンニは、路地を抜け、大きな通りへと出ていった。

たくさんの人が烏瓜を手に、川の方へゆっくりと流れていく。子どもたちはみな新品のぼりっとした服を着て、胸をはって歩く。連れ添う大人たちも、今日ばかりはみな心持ちあごをあげ、どこか新しい顔で歩いていく。ジョバンニは顔を上げた。今夜ばかりは街の灯にかき消され、そこに天の川をみつけることはできなかった。それとも目のせいだろうか。活字を追う仕事を終えたばかりだったジョバンニの目は、いくつものマグネシウムに灼かれ、さらにしょぼしょぼとしばたたく。

「きみがいなくなったあの夜から、一年が経ってしまっただよ、カムパネルラ。」

久し振りにつぶやいたその名が、ジョバンニの中に風を巻き起こした。カムパネルラのなにかを憂う横顔をみながら旅した時間が色とりどりの嵐となって、頭のとっぺんからつま先までを駆け抜けていく。

明滅する三角標。紫のりんどうの花。少女の手の中の萃